
My a Tail Online

銀臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My a Tail Online

【Nコード】

N6188Z

【作者名】

銀臥

【あらすじ】

次世代VRMMO、『マイアテイル・オンライン』。

プレイヤーは液晶に映るゲーム画面で、コントローラーを持ってプレイするのではなく、ゲームの中に精神を移送し、ゲームの中に入って直接プレイすることができる。

そう大々的に宣伝したゲーム会社『ゼウス』は、日本、中国、アメリカ、イギリス、フランスの五ヶ国から、それぞれ一万人のベータテスターを選出し、そのゲームをいち早くプレイしてもらうと宣伝する。

悪友達とノリで応募した中学二年生の主人公、四季町空人^{しきまち そらと}は、偶然そのベータテスターの枠に入る事が出来、夏休みの予定も特に決めていなかったなので、そのゲームをプレイすることに決めた。

だがベータテスト初日、彼らの世界は唐突に変わる。

クリアするまで脱出は不可能。ゲームオーバーは死に繋がるというデスゲームと化した中で空人はその過酷な現実を受け入れ、脱出のために異世界を剣士『クー』として生きていく。

序章

『世界』というものは、それ単体では姿を変えることはない。変化するという事象には、それを変化させる何かしらの存在がある。

例えば、一億六千五百万年と長く続いた恐竜時代が滅びを迎えた原因だ。

恐竜達はそれまで当たり前のように暮らしていたが、それを唐突に終わらせたのは空から飛来した小惑星だ。

直径十キロメートル、重さ一兆トンもある隕石が地上に落下し、落下した時に放たれた核兵器数千個分の威力もある衝撃によって、大量の塵が舞い上げられ、空を覆いつくし、地球は氷河期を迎える事によって恐竜達は死に絶えた。

たった一つの隕石によって、地球という世界は氷の星へと変化した。

だがそれは、けして『世界』が自ら姿を変えたのではない。

一つの隕石によって、姿を変えさせられたのだ。

やがて氷河期が終わり、哺乳類が現れ、人類の起源が大地に二足で立ち上がり、知識を持って文明を作り上げていったのも、全て人類が行ったことであって、けして『世界』がそれに合わせて姿を変えたわけではない。

また自然にできた造形物も、大気や地形、太陽からの熱、重力、様々な力があるからこそ、姿を変える事ができただけであって、けして『世界』がそれを造形しようと思っただけで造り上げたものではない。では『世界』というものを変えることが出切るものはなんなのか？ 私はここで思考と答えてみる。

思考というものは、すなわち人の考えだ。一人の考えによって、世界というものは姿を変える。

即ち、思考の数だけ様々な姿を持つ世界があるということだ。

私には思考がある。

それは私の中にも一つの世界があるということだ。

私が考えを変えない限り私の世界は決して変わることはない。

もしもここに新たな世界が誕生したとする。

その世界で、君達の中の世界は変わるのだろうか。

私は知りたい。

そのために、私は世界を作ろう。

どうか見せてくれ。

私が作り出した世界で君達が何を思い、何を感じ、何をして生き

ていくのか、どうか見せて欲しい。君達だけのMy a Ta

il（自分だけの物語）を。

それがこの世界を生み出した私のたった一つの願いでもある。

二〇五二年・一人の科学者の言葉

序章（後書き）

感想、コメントお待ちしております。

第一話 いつもの日常

二〇五三年、七月二十日。

明日から夏休みだなー、と俺、四季町空人はぼんやりと空を眺めながらそう思った。

ふと窓に映る自分の姿をしてみる。

その後で深いため息を吐く。

(うーむ、相変わらず見事なまでの童顔、もとい女顔……)

俺には、実年齢より幼く見られがちな傾向があった。

骨太さがあまり感じられない色白で華奢な身体。

中性的な線の細い顔立ち。

多少鋭さはあるものの、威圧的な雰囲気あまり感じられない両目。

多少はねっ毛があるものの、それでも大人しい印象が目立つ髪の毛。

初対面の人間が見れば、良くて年下の男の子。悪くて女の子。最悪で年下の女の子。ちなみにラストが一番多かったりする。

今年で十五になる思春期真っ盛りな俺にとって、一番のコンプレックスになっているのは言うまでもなかった。

はぁ、とため息を吐きながら教卓の後ろで未だに夏休み中の注意を述べている教師を一瞥する。

今はLHRの時間だった。

夏休み前日の今日は午前授業で、終業式を終えた後はLHRで必須連絡事項を教師が伝えればまっすぐ家へと帰れるのだが、そのLHRが空人には今はやたらと長く感じられた。

普段なら一応、聞くには聞く教師の言葉なのだが、自分のコンプレックスを見た後の憂鬱な気分からすぐに脱却できるほど俺は器用

じゃないので、教師の言葉など今では耳障りなものでしかなかった。早く終わらないかなー、と不真面目極まりない思考で机に突っ伏した俺はこの時、気付かなかった。懐に入れていた携帯端末が震えていたことに。

ようやくLHRが終わり、悪友達に一言声をかけると、俺はすぐに外に出た。

今日は予定があるのだ。

外に一步出ると、熱波が襲いかかってきて俺の動きを止める……ぐっ、おのれ太陽め、ここは日本の北端に位置する北海道だぞ。もう少し日差しを弱くしてもいいだろうが……。

アスファルトで固められた地面の上を肌から沸きあがってくる汗を滴らせながら歩き、熱線を放射し続ける太陽を横断歩道で止まるたびに忌々しげに睨み付けることを繰り返しながら、ようやく目的の場所に到着する。

とある大学病院。

俺が住むこの街で最も大きな病院に俺は用があったのだ。

別に俺は何か病気を抱えている訳ではない。

受付で手を消毒し、受付の人に挨拶を交わすと、そのままエントランスを過ぎ、階段を上って一つの病室の前へと立つ。

しき まちかなえ
四季町奏絵

俺の妹の病室だ。

三回ノックをしてからゆっくりとドアをスライドする。

白い病室の窓際に置かれたベッドの上で、点滴を打っている一人の少女が携帯ゲーム機を手に持って何やら難しそうな顔をしていた。

(ああ、またか)

俺は苦笑を浮かべると、手頃な位置に荷物を置き、室内に備えられているパイプ椅子に座ると、彼女のゲームが一段落するまでしばらく待つてやる。

俺の妹、四季町奏恵は気管支系の病気を患っており、そのせいで幼い頃から入退院を繰り返す日々を送っており、もはやこの病院に住んでいると言っても過言ではなかった。

現に彼女の病室は大量のゲーム機器で埋め尽くされていたのだから。

ちなみにこの大量のゲームを貸し与えたのは俺の母親である。

なんでも俺達の母親は、俺達兄妹二人を生む時まで携帯ゲーム機を手放さずに御産の痛みを耐えながらプレイを続け、ゲームをしながら出産を成功させた猛者だったらしい。

せめて妹だけはそんな不名誉極まりないものにはなって欲しくないと思うのが俺の切なる願いだった。

しばらく経つと、奏恵は達成感に満ちた顔つきになる。

どうやらゲームが一段落したようだ。

そのタイミングを見計らって。

「よう、奏恵」

声をかけた瞬間、奏恵はビクリと体を震わせ、すぐ隣に座っていた俺に視線を向けると同時に安堵し、すぐにハツとなると、今度は頬を赤く染めながら憎々しげな視線を向けてきた。

「何よ、あんたいたの」

「いたよ、三十分くらい前から。相変わらずゲームの事に関しては凄まじい集中力を発揮させるな」

皮肉を込めて言ったつもりなのだが、奏恵は今の言葉に対し、ふん、となぜか胸を誇らしげに張っていた。

「当然よ、どんなゲームでも一瞬の油断がゲームオーバーに繋がるの。このぐらい集中力はゲーマーには必須よ、必須」

「……あつ、そ」

皮肉をなぜか誇らしげな言葉で返されてしまい、母親と同じようにどんだん妹が廃人ゲーマーとしての道を歩みつつあることに若干ながら頭を痛めつつ、俺は鞆の中から一つの箱を取り出す。

「ほら、いつものやつ」

「ん、ありがとう」

箱を受け取ると、奏恵は嬉しそうな表情でそれを開ける。中には、バニラ、チョコなど数種類のクッキーが入っていた。

奏恵はクッキーを一つ手に取って口に運ぶと、幸せそうな表情を浮かべる。

その表情を見て、俺も笑みを浮かべる。

「うん、やっぱり美味しい」

「そりゃ、俺の愛情が入ってるからな。美味しいのは当然だ」
「ぶふっ！」

俺の言葉に耐え切れず、奏恵は思わずむせてしまう。

なにやってんだか、と呟きながら彼女の背中を優しくさする。一応の原因は俺にあるのだが、後悔はしていない。楽しいから。

しばらくむせていた奏恵だったが、ようやく発作も治まってきたのか、キッと涙目で俺を睨む。

「あ、あんた何変な事言ってるのよ!」

「変な事じゃないだろ、料理をする上で愛情というものはとても必要なものなんだぞ」

「あんたが愛情とか柄じゃないでしょ!」

「それは認める」

「ならやんな! バカ兄貴!」

「ん? そんな言い方するのなら、次から作ってきてやらないぞ?」

「うっ、そ、それは……」

俺の言葉に奏恵は急にしおらしくなる。

その表情に俺は苦笑すると、冗談だよ、と言いながら彼女の頭を優しく撫でる。

俺の言葉に奏恵は心の底から安堵したような顔を見ると、すぐに顔を真っ赤にして顔をプイッと逸らす。子供扱いされて恥ずかしいようだが、それでもどこか安心してるところを見ると、俺なんかの手料理がいかに彼女にとって大切な物なのかがよく解る。

そもそも俺がなぜこんな事をしているのかというと、奏恵が昔、病院食があまり美味しくない、と呟いたのを耳にしたのがきっかけで、その日から俺は奏恵にお菓子を作ってあげていた。

それだけでなく、少しでも奏恵の笑顔を見たくて、少しでも奏恵に寂しい思いをさせたくなくて、俺は三日も開けずに、妹の病室に顔を出してあげているのだ。

……俺って結構シスコンなんだな。

そんな解りきった事実思わず苦笑してしまう。

しかし奏恵の方はそれが少しだけ恥ずかしいらしく、そのままポフっ、という音を立てながら横になってしまった。

妹の行動に肩をすくめつつ、ふとベッドの横に置かれた雑誌の表紙に書かれているロゴが目についた。

「マイアテイル…オンライン?」

なんだそりゃ、と口にしかけてふと思いつく。

マイアテイル・オンライン。

世界初の次世代ゲームの名前である。

プレイヤーは液晶画面に映るCGを手に持ったコントローラーを使って画面上に映るキャラクターを操作するのではなく、『タラリア』と名付けられたゲームハードを用い、プレイヤーは肉体から意識を切り離し、その意識を仮想空間へ移送させる。

その仮想世界でプレイヤーは自らの意思で自由に体を動かすことが出来、ゲームの中で剣を振り回し、魔法を使う事が出来るという、世のゲーマー達の夢を体現させた究極のRPGと呼べるものである。しかし一つだけ問題があった。

この夢のようなゲームを実現させてくれるゲームハード『タラリア』なのだが、値段がもの凄くお高いのだ。

当然、一般庶民である俺達に手を出せる代物ではない。しかし。

(そついや、たしかベータテストの抽選をやっていたっけな)

この『タラリア』というゲームハードを開発した会社『ゼウス』は、日本、アメリカ、中国、イギリス、フランスの五カ国から一人ずつ、計五万人のベータテスターを選出して参加してもらう、と大々的に発表してきたのだ。

仮想空間で遊べる。

そう大々的に宣伝した『ゼウス』に対して応募が殺到したのは言うまでもない。

俺自身、悪友達とこの話を聞いた時に悪ノリのような物で手に持っていた携帯端末でベータテスターに応募したものだ。

「なあ、奏恵はこれに応募はしたのか？」

奏恵の事だから、きつと応募くらいやったんだろうなと思って質問してみたのだが…。

「…してない」

「へっ？」

予想外の返答に空人は思わず固まってしまった。

ゲーム廃人の道を着々と歩み続けている奏恵の事なのだから、この夢のゲームを体感できるベータテストには、きつと参加すると思っていたのだが…。

「あたしは今入院してるし…もし当たっても…今の体じゃ…」

「あっ………」

そこまで言われてようやく気付く。

奏恵は気管支系の病気を患っていて、そのせいで外出もままならない状態だ。

常に薬を点滴していなければいけないし、寝る時には呼吸器を付けないと危険な状態に陥ってしまう程、彼女の体は悪い。

「…悪い」

無神経な言葉をかけてしまった事に、俺は申し訳なさと同時に、自分の無神経さに腹が立ってくる。

「ううん、兄貴があたしの事を気遣ってくれてるのは解るから、大丈夫」

奏恵は優しく微笑みながら俺の手にそっと自分の手を重ねてきて

くれた。

「そっか…ありがとな、奏恵。おかげで元気出た」

優しく微笑みながら俺はそっと奏恵の頭を撫でる。短く切られた栗色の髪の毛を櫛で梳かすように、優しく、優しく撫で続ける。

「こっちも…いつも、ありがと」

後半に行くに連れ、消え入りそうなくらい低い言葉で礼を言う奏恵。

恥ずかしがり屋な妹に苦笑しつつ、ポンと頭を軽く叩くと、ふと時間が気になって懐から携帯端末を取り出してみる。

「ん？」

デスクトップを開くと、そこにはメールが届いている事を知らせる手紙のアイコンがあることに気付く。

誰だろう、とメールを開いて…固まった。

「兄貴？」

訝しげな声を上げる奏恵の声に反応し、俺は見間違いではないのか、ともう一度メールの内容を確認する。

何度確認しても内容は同じだった。

「……………当たった」

「はっ？」

「マイアティル・オンラインの募集に…当選した」

「えっ……………」

えええええええ！？と病室に妹の驚愕の声が響き渡る。
耳が思わずキーンとなつてしまったが、その事を指摘する前に奏
恵は俺の手から端末を奪い取ると、メールの内容を確認する。

「……本当だ……嘘みたい……」
「俺も嘘みたいだ……信じられねえよ」

しばらく二人して携帯端末に映るメールの内容に驚愕していたの
だが、少しずつ落ち着いてきたのか、深呼吸を繰り返して俺達は向
かい合うように座る。

「……で、これどうする？」
「どうするって……行ってくればいいじゃない。兄貴、行きたくて
応募したんでしょ？」
「いや、そりゃ行きたいけど……」

どこか歯切れが悪い俺の言葉に訝しげな視線を向ける奏恵。そし
てはあ、とため息を吐く。

「兄貴、ひよつとしてあたしに遠慮してない」
「……解つちまうか」
「そりゃ解るわよ」

そっか、と俺は苦笑する。
さすがに何年も一緒にいる妹なので、肉親の心情など、すぐに解
つてしまうのだろう。

「お前が入院してるってのに、俺だけ遊び呆けるなんて、少し気が
引けてな……」

「なら、どんな感じだったか教えて…楽しみにしてるから」
「…奏恵……」

奏恵の言葉に、決心した。

妹のお願いなら、断る訳にはいかないからな。

「解ったよ、どんなだったかしっかり体験してくるぜ！」

「楽しみに待ってるよ、兄貴」

さて、そう決まったら早速必要な物の準備だな。

夏休みの予定はどうしようか迷っていたところだったから、調度いい。この際だから楽しんでくるとしますかな。

だがその前に。

「……………お袋をどうやって説得するかだな」

「……………その、頑張りなさいよ」

ああ、頑張るさ……あの超廃ゲーマーの手からなんとしてでも、このベータテスターの抽選メモリを守ってみせる！

第一話 いつもの日常（後書き）

感想、指摘等、お待ちしております。

OUT II 現実 IN II 仮想世界

プシュ、バスのドアが気体を噴出させたかのような音と共に開かれる。

バスの中に乗っていた乗客、俺と同じ『マイアテイル・オンライン』の抽選に当たった、ベータテスター達が、ツアーガイドのお姉さんの後ろに続いて、ぞろぞろとバスを降りていく。

「やっと着いたか……」

愚痴を零しながら、俺はバスを降りる。

降りた瞬間、涼しい快適な車内の空間から一転、灼熱の熱帯空間となって俺に襲いかかってくる。

おのれ太陽、お前はなんでそう毎日毎日燃え続けてるんだよ。少しはcoolになることを覚える。熱いだけじゃ世の中渡っていけないんだぞ……って、太陽に向かって俺は何愚痴ってたか……。

はぁ、とため息を吐きながらガイドに従ってビルの中に入り、エントランスから各フロアを通って行くと、何やら劇場のような広々とした空間に辿り着いた。

ただ劇場と違うのは、椅子がスラリと並べられているのではなく、巨大な卵型のカプセルが何十台も設置されていた。

「あれが、タラリア……」

どこからか、夢でも見ているかのような口調で呟いたのが聞こえた。

次世代ゲームハード、タラリア。

ギリシャ神話に登場する、空を飛ぶ事が出来る黄金の翼が着いたサンダルの名を冠したゲーム機器。

テレビででしか見る事のなかった物が、今、目の前で、それも手の届く位置にあるとなると、ゲーマーとしては、感無量といったものがあるのかもしれない。

そこまでコアなゲーマーではない俺も、これから加速世界へと導いてくれる機体を目にして、どこか抑えきれないような感情が内側から込みあがってきているのを感じていた。

「それではみなさん、一度服を着替えてもらいます」

は？着替える？

「なぜ」と思ったが、俺が質問する前に、ダイバーなどが着るような上半身と下半身の一部を隠すようなピッタリとしたウェットスーツのようなものが手渡される。

訳が分からず、それでも着替えないといけないようなので、俺は更衣室に向かおうとしたのだが……。

「おっ、お客様！どこに入ろうとしてるんですか！？」

「へっ？」

何やら女性のスタッフが、更衣室に入ろうとした俺に向かって慌てて駆け寄ってくる。

一体どうしたんだ？

「そちらは男性用の更衣室です！お客様は、こちらです！！」

「はっ！？ちょ、待て！俺は！！」

弁明をする前に俺は女性スタッフに腕を掴まれ、必死の抵抗も空

しく、俺は女子更衣室の中へと連れて行かれた。

入った瞬間、服を脱いでいる途中の女性やら下着姿の女性やら、すでに裸になっっている女性の姿などが目に入ってくる。

マズイ。

これは確実にマズイ。

精神的な意味でも、社会的な意味でも、肉体的な意味でも、道徳的な意味でも、とにかく色々マズ過ぎる。

当然のように俺はその場から逃げだした。

後に俺を女子更衣室に拉致したスタッフに俺は男である事を説明すると、スタッフの方は「いや、方々はもの凄い驚きを見せていた。ちくしょう、どこでも俺は男扱いされないのかよ……」。

まあ、いいものが見れたから、少しだけど許してやるとしよう。

……さて、なんで俺達がこんなピツタリと体にフィットするような服を着せられたのかというところ……その理由はタラリアの中に入ってから解った。

タラリアの中に入ると、中に入ったのは、表面にぬるりとしたジェルで出来た椅子があり、座るとひんやりとした感触と共に、ぬるぬると全身にジェルがまとわりついてくる。

たしかに私服を着たままで、このジェルシートに座るのは無理があるだろう。というか、嫌だ。

しかし何でこんな仕様にしたのだろうか？

その問いには、すぐにスピーカーから洩れてくる声が答えてくれた。

『このジェルシートは、ゲームの中にダイブした時、プレイヤーが感じる感触や神経などの感覚器官をクリアにするためのものです。不快では有るでしょうが、ゲームの中にログインすれば、その感覚も無くなりますので、ご安心を』

なるほど。

たしかゲームの中では、現実世界にいる肉体の感覚はカットされ、

変わりに仮想世界にいる俺達の肉体へと、感覚が行くようになって
いるんだっとな。

向こうの世界では、物に触ればその感触が、熱が、重量が全て
感じ取れるらしい。

物が触れた情報を、脳へと移行する時に、それらを効率的に感じ
取れるようにするために、このシートが役に立つ…ということらし
い。

その事に感心しつつ、目の前にゲームのチュートリアルが流れ始
めた。

流れる内容は、主にゲーム内で使われるシステムの概要：例えば、
メニューの表示の仕方とか、ゲーム内で扱うスキル等の使用方法と
か：そして。

『貴方の種族を選んでください』

「種族？」

首を傾げながら見てみると、画面上に五つの種族『ヒューマン』、
『エルフ』、『フェアリー』、『ホムンクルス』、『ドラグーン』
の名前が表示された。

なるほど、RPGとかでよくある種族決め、という奴か。種族ご
とに各能力が異なるみたいだし、習得スキルとかも違うのかもしれ
ないし、容姿も種族ごとに異なっているみたいだ。

エルフは長くとがった耳を持った姿に綺麗な姿をしていて、フェア
アリーはエルフみたいに長くはないが、とがった耳と、何より背中
に半透明の羽が生えている可愛らしい容姿をしていた。

ホムンクルスはヒューマンと大して変わりのない容姿をしていた
けど、体の一部に紋様のようなものが浮かんでいた。

最後にドラグーンだが、本来耳が付いている場所から、魚のひれ
のようなものが生えていただけだった。

……なんというか、フェアリー以外、ほとんどただの人間に何か付け加えただけのような感じの物だった。

とはいえ、一応俺の分身となるものなのだから、真剣に考えておく。

「森の住人エルフ…なんて俺の柄じゃないし、フェアリーも俺の柄じゃないから…やっぱ無難にヒューマンかな？」

そう呟きながら、俺はパネルをタッチして『ヒューマン』を選択する。

『では、次にあなたのアバターの名前を決めてください』

「名前か…何にしようかな」

現実世界と同じに…いや、これは不特定多数の人間がいる空間だ。どんな思考を持っている人間に出会うのかも解らないし、本名は避けた方がいいかもしれない。

そうなると何にするか迷う。

何せ呼ばれるのは画面で動くキャラクターなどではなく、俺自身だ。

現実と違いすぎる名前というのも違和感があるからどうかと思うし…ここは本名からもしった方がいいかもしれない。

「ええっと…四季町だから…s i k i i…いや、これはダメだな」

本当に何にするかな…名字はやめて、名前から取るとするか。

空人だから…空…s k y…いやいや…人だから…h u m a n…アホか俺は…。

うーむ…空、空…くう、くー…C o u…。

「よし」

俺はパネルに『COU』と打ち込むと、そのまま少し待った。

『それでは最後に、ヘッドギアを装着して、ゆったりと椅子にもたれかかって下さい。あとは機械が貴方がたの意識を、仮想世界へと潜行してくれます』

スピーカーの指示に従い、椅子の上部に備え付けられているヘッドギアを頭にかぶる。その後に、椅子にゆっくりと楽な姿勢で座ると、次第に意識がゆっくりと闇に落ちていく感覚が襲い掛かってくる。

『それでは、ゲームスタートだ…健闘を祈るよ、プレイヤー諸君』

どこか期待が込められたような声を聞きながら…俺の意識は、闇に落ちた。

「んっ……」

意識がゆっくりと覚醒され、俺は目が覚める。

気がつけば、俺はどこかの草むらの上に横たわっていた事に気付く。

ゆつくりと立ち上がり、辺りを見渡してみると、そこには石畳で造られた道や、レンガなどを重ね合わせて造り上げられた、現代ではまず見る事のないような建造物が建っていた。
そこまで見て、ここがどこなのかようやく気付く。

「ここが…マイアテイル・オンラインの世界なのか……？」

信じられなかった。

目の前に広がる広大な草原。

頭上に広がる蒼穹。

頬を撫でる風の風圧や、風でなびく髪の毛の感覚、草むらの葉が擦れる音など、何もかもが現実世界のものと同変わらないように感じていた。

「すげえ…これが本当に仮想世界だなんて思えねえ……」

ためしに近くにある石を触ってみると、表面のゴツゴツとした触感や、ひんやりとした温度が伝わってきて、手に持ってみると、たしかな質感がそこにあった。

何もかもが現実と酷似している。

けれど違うところも多々あった。

まず一つ目なんだが…。

「なんだ、この格好は……」

近くにある噴水の水に映る俺の姿。

俺の格好なのだが…白いジャケットに黒いジーンズという組み合わせだった。現代風のファンタジーものの格好といえばいいのだろうか。

問題なのは、俺の容姿だ。

俺の容姿は現実世界とまったく変わり映えのないものだった。

しかし俺の髪の色と目の色が変わっていた。

髪の色は炎のような紅蓮の色彩を持った、艶やかな長髪になっていて、瞳の色は夜空に浮かぶ満月のような、黄金の色へと変化していた。

「うわっ、これが俺か？なんていうか、二次元とかでしか見られないような姿になってるぞ……というか……」

さらに髪の色が現実世界の姿より背中に届くぐらい長くなっていて、前よりも女の子っぽい雰囲気が出ていた。

たしか髪型や目の色などは、その人に似合うものをゲームシステムが選んでくれるってチュートリアルで言っていたような気がするが……こんなもの迷惑以外の何物でもないぞ、ゲームシステム！ただ自分で見ても似合っていると思ってしまうから腹が立つ！ちくしゅう、俺はゲームの中でもこんな扱いなのか……！

俺は怒りと、自分が思わず口にしてしまった言葉にしばらくその場で悶えていた。

~~~~しばらくお待ちください~~~~

……だんだんと空しくなってきた、俺はゆっくりと立ち上がって噴水に映る自分の姿を確認する。

……可愛いというよりは、クール系の顔だというのが唯一の救いなのかもしれない。スズメの涙程度の救いだけ……。だがそこで、一つの疑問が頭に浮かんできた。

「まさかゲームのシステムにも、俺が女だっと思われてるんじゃない……」

「冗談で呟いてみるが、段々と不安になってきて、思わずメニュー画面を開いて確かめてみる。」

「えっと…たしか右手を宙に上げて、人差し指と中指を立てた後、横にスライドさせる…だったよな」

ぎこちない動きで指を横にスライドさせると、ポン、というピアノのような音と共に、目の前に青い水晶のようなカラーで浮かび上がる四角形のメニュー画面が現れる。

「おお、すげえ……………さてと、ステータス、ステータス」

一瞬だけ感動したが、その後すぐに『STATUS』と表示されているパネルをタッチする。

NAME Cou『クー』 Lv1 male

『Male』…つまり、男。

「よ、良かった……………」

言葉と共に、俺はその場に座り込んで、長いため息を吐く。

多分、生まれて初めてといえる程、俺は心の底から安堵したと思う。安心はしたが、それならばなぜこんな姿にしたのか、とゲームシステムに問いかけてみたくなるが…まあ、それは置いておく事にしよう。

さて、一安心したところで…。

「いっちょ、戦いに行くとしますかな！」

俺は『ITEM』と表示されているパネルをタッチし、さらに『EQUIP』と書かれているパネルをタッチし、アイテム欄に表示されている中に入っている装備アイテムを一瞥していく。えつと武器アイテムは…『木刀』、『ウッドランス』、『ウッドロッド』、『ウッドアックス』…って、ほとんど木製じゃねえか…。しかも剣だけなぜか『木刀』って日本語表示だし…………。

「まあ、いいか…」

俺はメニューの中から『木刀』を選ぶと、人型の形になっている部分にスライドさせる。

スライドした木刀のアイコンが人型に触れた瞬間、俺の手の中に木刀が現れる。

「おつ、すげえ本物の木刀みたいだ…でも、なんか修学旅行の土産屋にあるようなものみたいだな…………」

なんつー貧弱な装備だ…………まあ、初期装備なのだから仕方ないか。木刀を腰のベルトのホルスターに下げると、俺はそのまま町の外へと駆けだしていった。

これから始まる、冒険の予感に期待を膨らませながら…………。

OUT || 現実 IN || 仮想世界（後書き）

感想、指摘、お待ちしております。

### 第三話 変化する世界（前書き）

あけましておめでとう！お正月！

### 第三話 変化する世界

「おおおおおおお！？」

とつさに横に跳んで目の前から俺に向かって突っ込んでくるイノシシの突進を避ける。

俺のすぐ横を通り過ぎたイノシシは、そのまま真後ろにいた岩に激突して、その動きを止める。

直後にイノシシ：ボアの頭上に表示された緑色の横線『HPバー』と呼ばれるそれが、ググっと少しばかり減少する。

今俺は『始まりの島』と呼ばれる場所の草原地帯に足を運んでいった。

目的は戦う事。

VRMMOは、実際に体を動かして戦うことができる。

現実世界ではありえないシチュエーションで、様々な武器を手にして戦う。

現実世界では重たい武器を振るえない人でも、この世界ならレベルを上げるだけで武器を手にして様々な化け物達と渡り合える事が出来る。

昔、ヒーロー番組とかを真似して強くなろうと思った事があった。けどすぐにあんな現実離れた動きは不可能だと解って止めてしまったのだが、この世界ではその続きを見る事が出来る。

TVで動くヒーロー達のように戦場を駆け、剣を手に、様々な敵と戦う。

ある意味VRMMOの醍醐味というものは、この事なんじゃないのかと俺は思った。

とは言え。

「おわぁー！」

ボア相手に逃げまくる今の俺では、ヒーロー達のように動くと言  
う事は、まだまだ先の話になりそうだった。

「んごあ!!」

痛みは無いが、凄まじい衝撃を腹部に受けて、俺は地面を転がる。  
俺の視界右上に表示されているHPバーが減少し、残りはもう半  
分を切っていた。

このままでは、負けて死んでしまう…といっても、これはゲーム  
だからきつと死んでもすぐにどこかで復活するだろう。

所詮これはゲームだ。ゲーム内での死は、現実の死じゃない。  
だが簡単に諦める気は更々ない。

たとえゲームでも、俺は最後までしっかりと足掻いてみようと思  
っている。

俺は…こういったケンカ事では負けず嫌いなんだ。  
立ち上がり、木刀を構えると同時に啖呵を切る。

「かかってきやがれ！」

「プギー!!」

俺の啖呵に応えたかのように、ボアは一鳴きすると、俺に向かっ  
て突進してくる。思わず横に跳んで回避したくなるが、それを必死  
にこらえる。

猛スピードで俺との距離を詰めてくるボアの両目を睨みながら、  
俺はギリギリのところまで引き寄せると体の向きを横にずらした。

（そこだっ!）

俺のすぐ真横を通り過ぎようとするボアに向かって、俺は手にした木刀を振るう。

ゴギイ！という嫌な音と、クリティカルヒットを示した赤白く輝く大きなライトエフェクトと共に、俺の木刀は見事にイノシシの頭部を打つ。

木刀が命中した瞬間、ボアの頭上にHPバーが表示され、残り三割弱を残して一気にゲージが減少した。  
しかもだ。

今の一撃が効いたのか、ボアの頭上には星のような物がグルグルと回転していた。

これはたしか『気絶』という状態で、この状態異常にかかると、しばらくの間動けなくなってしまう。

この好機を逃す訳にはいかない。

俺はスキルを発動させた。

木刀に淡いグリーンの光が纏うと同時に、システムが俺の体を動かす。

片手剣スキル、無属性単発技ライト・エッジ。

地面を蹴るようにして、一気にボアに向かって踏み込んだ瞬間、上段から斜めへと袈裟斬りする。

ザンツ！！ボアの体を、緑色の光が両断した。

「プギイ……」

弱々しい断末魔と共にボアの体はゆっくりと倒れていく。その倒れている途中で、不自然に静止すると同時に、ボン！という小さな爆発音と共に淡い光の粒子となって消える。

本日五度目の勝利だ。

「ふう……つつ！」



戦闘が終わって一息つくこうとした瞬間、ズキン！と頭に鋭い痛みが走って思わず顔をしかめる。

その瞬間、世界が一瞬だけ画像データを引き伸ばしたかのようにぶれた。：ような気がした。

「いつつ、一体何だ？」

痛みが引いてすぐに辺りを見渡してみるが、見渡す限り広がる草原は、先程と特に変わった様子はなかった。

気のせいか？と思いつながら、地面に落ちた木刀を拾い上げて鞘に納め、アイテム欄から回復アイテムである『リンゴポーション』を取り出す。

掌に青い瓶が光と共に出現し、蓋を開けて瓶の中の液体を口の中に入れる。リンゴ味の冷たい液体が喉を通り過ぎていく感覚に心地よさを覚えながら、視界の端に表示されているHPバーがみるみる回復していくのを確認する。

瓶の中身を全部飲み干した時には、俺のHPは全快した。

「……一度戻ってみるか」

飲み干して空っぽになった瓶が、光の粒子となって消滅していくのを見ながら呟く。

内心、本当はもっと色々なモンスターと戦ってみたかったのだが、何やら嫌な胸騒ぎを俺は感じていた。

一度街にでも戻ってログアウトしてみるか…と呟いた時、俺のすぐ後ろに影がかかり、慌てて俺は横に跳んだ。

ズンっ！！という重厚感がある音が草原に響く。

目の前には大人よりも大きな赤い体色をした筋肉質の体に、トゲがやたらついたバットよりも大きな棍棒を持ったモンスター、『オーガ』が目の前にいた。

「出鼻を挫かれるってのは、こういうのを言うのかねえ」

鞘から木刀を抜き放ち、目の前のオーガに対して構え…ようとした瞬間、違和感のような物を感じた。

（なんだ？）

眉をしかめつつ、首を傾げて違和感の正体を探ろうとしてみたが、その前にオーガは俺に向かって雄叫びを上げながら棍棒を振り回してくる。

思考を中断し、俺はとっさに木刀を盾のように構えて振り下ろされる棍棒の一撃を真正面から受け止める。

「ぐっ！」

ゴンツ！という音が鳴り響き、振り下ろされた一撃に耐え切れず、俺は地面に倒れる。

勢いよく地面とキスをする羽目になってしまったが、叩きつけられた痛みを感じる暇もなく、オーガは次の一撃を放とうとしていた。慌てて俺は隣に跳んでその一撃を避け、懐に入ると同時に木刀をそいつの横っ腹に打ち据える。

「グルア！！」

今の一撃が効いたのか、オーガは痛みで顔をしかめた…ように見えた。

…ただのデータの塊が痛みを感じているだと？

一瞬、疑問が頭の中に浮かんだが、俺は頭を振るって湧いた疑問を振り払い、懐に飛び込むと同時にオーガの顔面目がけて木刀を振る

った。

オーガは俺の奇襲に気付いたようだが…一瞬の差で俺の方が早かった。

ゴキン！という鈍い音が響き、オーガの顔面に俺の木刀が打ち据えられた。それと同時に、オーガの真上にHPバーが表示され、それがググつと減少し、オーガの残りHPが半分を切つたのを確認した。

…あと少し！思わずニヤリと笑みを浮かべた瞬間。

「グルアー！！」

まるで今の俺の態度が気に食わない、といったばかりに棍棒を滅茶苦茶に振り回し始めるオーガ。

「くっ！」

横に跳ぶ暇もなかった俺は、仕方なく体を捻って回避を続ける。

だが俺は現実世界では、空手や柔道などの格闘術を習ってる訳でもなく、ただの多少喧嘩慣れしているだけの中学生に過ぎない。

棍棒が顔のすぐ横を通り過ぎていく度に、胸の奥を冷やりとした感覚が過ぎていき、知らず知らずのうちに冷や汗みたいなのが湧き出してくる。

正直に言うと、すげー怖い。

怒り狂った表情で俺に向かって棍棒を振り回してくるオーガの表情が、振り回される棍棒の攻撃の一つ一つが、そして…俺に向かって放たれてくるビリビリとした怒りの感情が…感情？

そこまで思考した瞬間、俺は今まで感じ続けてきた違和感の正体を唐突に俺は理解した。

(まさか…このビリビリとしたようなもの、敵意か!?)

先程から肌を刺すような感覚を俺に感じさせていたものの正体。それは、敵意。

喧嘩などの時に感じる、相手に対して怒りや憎しみなどの感情をぶつけてくるもの。

それが、目の前のモンスターから感じられた。

一瞬それを否定しようと思ったが、視界の端でオーガが棍棒を振り上げているのを確認すると、慌ててその一撃を避けるために体を動かす。

「グルウア！！」

雄叫びを上げながら突っ込んでくるオーガの一撃を避ける、と同時に確信した。

やはりこれは敵意だ。

そう解った瞬間、一つの単語が頭をよぎった。

AI。つまり、人工知能。

人工的に造られた、人間で言う『性格』というものだ。

最近では掃除機や冷蔵庫などの電化製品だけでなく、事故を未然に防ぐために、車にAIを付けると言う話が出ていたのをニュースで言っていたのを覚えている。

いくらAIの技術が日進月歩の世の中とは言え、本物と言っても差し支えないような敵意をぶつけてくるものを開発していたなんてな…。

「ぐお！？」

突然左脇腹に強烈な痛みと衝撃を感じ、それがオーガからの棍棒の一撃だと理解した瞬間、俺の体は宙に吹っ飛ばされ、草原の上を何度も転がった。

「がっ、は……」

やべえ、油断した。俺の視界の端でHPバーが二割程減少し、残りHPが半分くらいになった。

脇腹を押さえながら、俺は何度か咳き込む。

「痛え……痛い？」

棍棒の一撃を受けた脇腹から痛みが伝わってくる。

脇腹を押さえていた右手を見てみると、べつとりと赤い液体が俺の手についていた。

血だ。

トゲだらけの棍棒の一撃を受けたのだから、攻撃を受けた場所から出血するのは当然の結果といえそうなのだが……なぜだ？

さっきボアの突進を受けた時は、当然のように痛みは無かった。

それ以前に、草の上を何度も転がって回避していたのだから、かすり傷ぐらいできてもおかしくは無かったのに、そんなものは一つも出来なかった。

当然と言えば当然だ。

この世界は、様々なデータで構築された仮想世界。

『安全に遊ぶ』という名目で造り上げられた世界なのだから、痛覚などはほとんどシャットアウトされるし、流血などのエフェクトは……まあ、痛覚が遮断されてるんだから必要ないか。

それなのに、俺は痛みを感じていた。

俺が動きたびに脇腹から血が溢れ、ズキズキと痛む。

「ぐあっ！」

俺が痛みを耐えている間にも、オーガは棍棒を振って俺の背中を

打ち据える。

俺は草原の上を何度も転がり、仰向けに倒れた。転がっている途中、何度も頭や体を地面に打ち付けられて呼吸が止まりそうになったり、頭がくらくらしたが、視界の端に木刀を見つけた瞬間、それに飛びついて構える。

そしてそれを手に握った瞬間、目の前のオーガに向かってそれを振るう。

「おおおおおおお！！！」

叫びと共に放った一撃は、オーガの顔面に命中した。

オーガが痛みで苦しむ声を上げるが、それを無視して俺はオーガの腕に向かって蹴りを放つ。

俺の蹴りを受けたオーガは棍棒を離してしまい、棍棒はそのままオーガの後ろへと飛んでいく。

「おおおおお！！！」

叫び声と共に、俺は片手剣スキルを発動させる。

木刀にライトグリーンの光が灯ると同時に、上段から下段への袈裟斬り！ライト・エッジが、オーガの体を斜めに切り裂く。

「グリアアア！！！」

「おおおおおおお！！！！！！！」

オーガが悲鳴を上げるが、それも無視する。

スキル発動後の硬直から解放されると同時に、木刀をオーガに向かって振りまくる。奴の上に表示されているHPバーがどんどん減少し、やがてゼロになる。

「グオオオオオオオン！！」

断末魔の叫びと共に、オーガの体は淡い粒子の光となって霧散した。

視界にフロントで今の戦闘で手に入った経験値が加算されていき、そしてファンファーレが鳴り響く。

『COUは、レベルが2になりました』

どうやら今の戦闘でレベルが上がったらしい。

だが俺はそのことに感動する暇もなく、メニュー画面を開いてアイテム欄から回復アイテムを取り出すと同時に、リンゴ味のポーションを口の中に流し込んだ。

ごくごくと瓶の中を一気に飲み干すと、その場に倒れ込んだ。息が荒い。

HPは全快したのを確認すると、攻撃を受けた左の脇腹を探ってみる。

先程まで傷があったその場所は、俺が流した血によって湿っていたが、綺麗に塞がっていて、痛みも感じなくなっていた。

「……ったく、一体何がどうなってんだよ」

訳が解らなかった。

モンスターが突然高度なAIを持つようになったり、いきなり痛みを感じるようになったり、血が流れるエフェクトが追加されたりと、疑問が次々と頭の中に浮かんできた。

はぁ、とため息を吐くとメニュー画面を開く。

理由はログアウトして、スタッフに質問するためだ。

たしかフィールドでは即時ログアウトは出来ないとか言っていた

ような気がするけど、今は非常事態だと感じるため、俺はこの場でログアウトするためにログアウトボタンを……。

「ん？」

一瞬、自分の目を疑った。

目の前に表示されているメニュー画面を何度も確かめ、隅々まで搜索してみるが……なかった。

ログアウトボタンが、無かった。

「な、なんでだ……どうなってんだよ、本当に……」

俺の呟きは、吹いてきた風にかき消された。



### 第三話 変化する世界（後書き）

感想、批判、お待ちしております。

## 第四話 現実と化す仮想世界

「……………何が、一体何が起きたって言うんだよ……」

頭を掻きながら、俺は悪態を吐く。

オーガとの死闘を終えた俺は、その場に座り込んで、一体この世界に何が起こったのかずっと考えていた。

考えられたのは三つ。

一つ目はデータサービス初日だから、そのせいで何かのバグが起きた。

サービス初日なんだから、こんなバグくらい起きるよなあ…なんて考えては見たのだが、どんなバグが発生すれば痛覚や流血エフェクト、さらにログアウト不能などという明らかに異常すぎる事態が起きるっていうんだよ…という答えに行き着くので、却下。

二つ目はハッカーかウイルスかの侵入によつて、不正なデータ改ざんが行われた。

最初これは結構いい線いつてるんじゃないのか、と思ったのだが…このゲームの中には、日本だけでなく、アメリカや中国、イギリス、フランスの五カ国からも同時にログインする事が可能な超大規模なデータプログラムだ。

総データ量が凄まじいものになるこのゲームを、ログインしてからたったの二、三時間程度でここまでの変化を起こす事が出来るとは思えないので、これも却下。

最後、このゲームが最初からこう(…)いった(…)仕様がだった(…)場合。

「……いや、これはいくらなんでもないだろ」

我ながらバカらしい考えだと思う。

ゼウスはただのゲーム会社だ。そんな会社が最初から五万人以上の人間をほとんど現実に近い世界に閉じ込めて何をするっていうんだ？

戦闘続きで頭がおかしくなったのか？

「……………街に行くか」

この世界、マイアティル・オンラインではモンスターとの戦闘は全てシンボル・エンカウント、つまり遭遇戦ということになっていて、さつきみたいに残るから接近され、不意打ちなどという目に会う事もある。

つまりこの場に居座り続けると言う事は、いずれはモンスターに見つかってしまうということに繋がる。

考えるのを止めると、俺は鉛のように重くなった体を無理やり動かして立ちあがる。

もしかしたら街の方で、ゼウスから何かの報せが届いているかもしれない。

一抹の希望を抱いて、俺は街へと足を運んだ。  
だけど。

『健闘を祈るよ、プレイヤー諸君』

あのチュートリアルから聞こえた、どこか期待が込められたような言葉が頭の片隅に残って、離れなかった。

始まりの街。

RPGでお決まりのような名前を付けられた街に踏み込んだのだが、中は喧騒に包まれていた。

広場に向かう途中、何度も『どうなってんだ！？』『ログアウトできないぞ？』『バグじゃないのか？』などの声が入ってくる。やはりこの異常事態に動揺しているのだろう。

当たり前といえば当たり前だ。

いきなり見知らぬ環境に投げ出され、しかも帰れなくなったのだ。これで冷静でいられる人間なんてほとんどいるはずがない…そうすると、俺はその中でかなり稀有な存在なのかもしれない。

先程から妙に心が落ち着いていた。

街に入るまで妙な胸騒ぎがしていたのだが、この喧騒を聞いているうちにスウ、と何かが沁み渡っていくように心のざわつきが治まってきた。

多分、動揺しているのが俺だけではないという事を知って、安心したからだと思う。

我ながら現金な物だな、と苦笑した時、胸に軽い衝撃が走り、同時に『きゃっ！』と可愛らしい悲鳴が響いた。

「あっ、悪い」

周りばかり気にしていたせいか、前方にあまり注意がいかなかったようだ。目の前にいた、女の子にぶつかってしまった。幸い、彼女はその場でふんばっていたみたいで、転ぶ事は無かった。

「だ、誰！？…ひっ！！」

ぶつかってしまった女の子は、俺に向かって振り向いた瞬間、悲鳴をあげた。

……なんか傷付く反応だ。俺って女顔なのは自覚してたけど、悲鳴をあげられるような顔はしていないはず……なんて思いながら下を向いた途端、原因が判明した。

俺の今の格好だ。

先程のオークとの戦闘で、俺の服はボロボロの血だらけだった。

真っ白いジャケットは至る所に血が飛び散っていて、しかも俺の顔にも多少血がついているのだから、噴水の水面に映る俺の姿を試みると……正直、かなり怖い。

これは怖がられても仕方ないよな…と、内心で苦笑しながら目の前の少女に謝る。

「あー、すまん。さっきまで外で戦ってたんだ…」

「た、戦ってて…そうだったの？」

「ああ…っていつても、こんな格好になったのは、最後の戦闘でなんだけどな……」

そう言いながら、俺は目の前の少女の姿を見る。

年齢は俺と同一年ぐらい。腰まで届くサラリとした銀髪に、夜空を閉じ込めたかのような群青色の瞳、そして職人が丁寧に手を加えたかのような顔立ちをした美少女だった。

そして…思わず目が行ってしまう…彼女の胸。

彼女の胸は…その…周りにいる同年代の女性から見ても、凄まじいくらい逸脱しているぐらい大きな胸だった。

どのくらいの大かさなんだろうか…などと邪な考えが出てきた瞬間、思考を中断して目の前で先程の俺の言葉に首を傾げている少女の顔に視線を向ける。

「いったい、どういうことなんですか？」

動揺したような彼女の言葉に、俺は肩をすくめながら答える。

「わからない…最初の頃は普通に痛みなんかなくて、ダメージを受けても血が出るような描写は無かったのに、十…数分前くらいかな？頭に鋭い痛みが一瞬だけど走った後からこうなってた…」

「そう…なの……」

「なあ、あんたは頭が痛くなったりしなかったか？」

「私も…少し前に頭が一瞬だけ痛くなって……」

「そっか…そうになると…俺だけじゃなくて…」

多分、他の連中も痛みとか、流血とかを感じるようになっていんだろうな。

彼女も同じ事を考えたのだろうか、不安そうな表情を浮かべていた。

俺はそんな彼女の肩に手を…初対面の女性の体に触れるなんて、少しばかり気が引けたのだが、今はそんな事を言っている場合ではないので、多少の罪悪感を感じつつ、俺は彼女の体に手を置く。

「大丈夫だ」

「えっ？」

俺の言葉に彼女は驚いた表情を浮かべる。

「意味が解らない状況だけど、お前は一人じゃない。不安なら目の前にいる俺を頼るくらいしろ。その方が少しは気が紛れるだろ？」

「えっ、あつ…」

「こんな状況なんだ。少しでも頼れる奴はいた方がいいだろ？」

相手から受けた痛みがそのまま肉体に伝わり、血が噴き出すような残酷なゲームシステム。

さらにそんな悲惨な現実から逃さないかのように、俺達の唯一の脱出手段だったログアウトが出来ないこの状況。

不安になるのは仕方ない。

そんな状況だからこそ、今は協力し合うのは当然のことだ。

でも彼女は俺の言葉にどこか緊張したような表情を浮かべていた。

……まあ、見知らぬ男にいきなり頼れとか言われても下心があるかもしれないって考えちゃうよな。もちろん、そんなものはないけど。

その辺は一応、言っておいた方がいいかもしれない。

「あー、別にナンパとかそういうものじゃないから」

「えっ？同姓なの？」

「違えよ！！見た目こんなんだけど、立派な男だからな！俺！！」

「ええ！？あなた、男の娘なんですか！？」

「なんか違う意味合いに聞こえたんだが、否定するとややこしくなっちゃうから、とりあえず男だと言っておく！」

ちくしょう、やっぱり初対面の人間だところという反応が返ってくるんだよなあ…しかも、さっきなんか聞き捨てならないような単語があつたよな気がする。

「と、とりあえず…ここはいったん協力し合おう…こんな状況だ。誰かに頼った方がいいのはあんただって解ってるはずだろ？」

「……たしかにそうだけど…」

「なら、ちよつとは頼れって」

「でも今日が初対面の人に迷惑は…」

「初対面だからって迷惑をかけちゃいけない、なんて決まりなんてないだろ…それに、目の前でそんな風に泣きそうな奴をほっとけるかよ」

「えっ？」

俺の言葉に彼女は慌てて瞳を擦る。

彼女の瞳は俺と出会った時から潤んでいた。

けれど初対面の人間の前で泣いてはいけない、とでも思っていたのだろう。必死に涙を堪えていたのが、傍から見ても解っていた。

俺はそんな彼女の頭に手を乗せて優しく撫でる。奏恵にしたように、髪の毛を痛めないように優しく、櫛で梳かすように、そつと。



「こんな状況だ。泣いている奴が一人二人いてもおかしくはない  
て」

「で、でも……」

「俺なら大丈夫だ。さっきまで混乱してたけど、今はもう落ち着い  
ているからな」

「……どうして、そんなに落ち着いていられるんですか？」

「えっ？うーん……」

彼女が、訝しむかのように俺を見ていた。

彼女に言われて、改めて俺は何で自分が落ち着いているのかを考  
えてみる。

たしかにいきなり痛みを伴う戦いを強いられて、さらに抗議しよ  
うと思ってメニュー画面を開いたらログアウトボタンが無かったり  
で、少しだけ動揺してしまっただけ……それも街の中に入ったら落ち  
着き始めていた。

一体どういう事だ？

周りに人がいたから？

いや、だっただらむしろ混乱している人をたくさん見ていた訳だか  
ら、普通だったらますます混乱するはず……だよな？

なんでだ？たくさんの困ったような声を聞いていれば、普通は動  
揺してどうすれば解らなくなるはずなのに。

「……悪い、俺にも何で自分がここまで落ち着いているのか  
、」

解らない。

そう言おうとした瞬間、空から火災報知機のような警告音が響き渡った。

「な、なんだ!？」

突然響いた警告音に俺は、いや、その場にいたほとんどの人間が驚きの声を上げた。

その直後に空にヒビが入り、あっという間に空全体に広がったと同時にガラスが砕ける音と共に空が砕けた。

「空が……紅くなった!？」

先程まで澄み渡るかのような青空が広がっていたのだが、ガラスのように空が砕けたのと同時に、空の色がまるで血のように赤黒く塗りつぶされた。

周りから動揺の声が上がる。

無理もない。

先程からおかしな現象が続いているのに加え、こんな人の恐怖を煽るような演出をされれば、誰だって不安になる。

俺自身、先程まで落ち着いていたのが、まるで嘘のように再び恐怖感のような物に襲われ、体中に震えが走り、手足の先が一気に冷たくなるような感覚が走る。

ギョッ。

俺の隣にいた少女が、俺の服の裾を握りしめていた。

彼女もまた、この状況に押さえられていた恐怖が湧きあがってきて、不安になったのだろう。

震える彼女の手を、俺は右手で包むように握ると空を睨みつける。すると紅い空に滲み出るかのように黒い文字が刻まれていった。

『私が生み出した新世界によろこそ、新たなる旅人達よ』

「生み出した世界？…というか、この声…」

空から響いてきたのは、タラリアで俺達にチュートリアルを流した時に流れた声だった。

一体どういう事だ？と周りから疑問の声が響く。

それに応えるように深紅の空に漆黒の文字が再び刻まれる。

『まず君達はこの世界からログアウトが不可能になり、さらに痛覚、流血などの変化が起こったことにはもう気付いているかな？』

辺りから再び動揺の声が響き渡る。

どうやらログアウト不能なのは解っていたようだが、痛みや流血エフェクトが追加されたのは、やはり俺達を含めた一部の人間しか知らなかったみたいだ。

だが文字はまた刻まれていく。一文字一文字が、周りの人々を恐怖させていくものだというのに、紅い空という紙に淡々と機械的に浮かび上がっていく漆黒の文字を見ると、俺は知らず知らずのうち歯を強く食いしばり、拳を強く握りしめていた。

『だが安心したまえ、旅人の諸君。君達はこの世界から出る事が出来る方法がある』

その言葉に、俺を含めた何千人という数の人間が一斉に空へと視

線を注ぐ。

おそらくは一抹の希望を込めたものが大多数だろうが、俺はその言葉に疑心を抱いていた。

『その方法は、この世界の制覇：つまり、ゲームをクリアするということに他ならない』

告げられた言葉に、周りに再びざわめきが戻る。

せっかく帰れると思ったのに、その希望が打ち砕かれたような発言に動揺した人が多かったようだ。

だが中には、いったいどうやってゲームをクリアするんだ、などと前向きな意見が出ている人達もいた。

その疑問に答えるように、文字は刻まれる。

『この世界には、私が用意した二百もの世界が存在している…そしてそれぞれの世界には、その守護神たる存在がいる…彼らを全て倒す事ができれば…その瞬間、君達は元の世界へと帰る事が出来る』

守護神…つまりボスマンスターを倒して行けばこの世界から脱出する事が出来る、という仕組みか。

………だけどそれってつまり二百体もいるボスを倒さないといけない、ということだよな？

不謹慎だが、気が遠くなるような話だなと思ってしまっ。

だがこの世界から脱出できる方法が解ったことにより、周りから僅かながら希望のような物を感じた表情を浮かべる人々が視界の端に映った。

だが次に告げられた言葉によって周りは一気に凍りついた。

『この世界は全てが本物だ。君達が感じている恐怖も、モンスターから受ける痛みも、全てが現実のものへとなっている。さらに…勘

が鋭い一部の人間はもう気付いていると思うが、この世界でHPを失うと言う事は…君らの死へと繋がっている』

「……なっ!?!」

死…だと!?!?

この世界でゲームオーバー、つまりHPを全損させると言う事は、そのまま現実の死へと繋がるっていいのか!?!?

「そ、そんな……タラリアはただのゲームハードで………」

俺の裾を握りしめている少女が、消え入りそうな声で呟く。

そうだ、タラリアはただのゲームハードだ。そんな事はできるはずが……。

俺の疑問に答えるかのように、空に再び漆黒の文字が浮かび上がる。

『具体的に言えばHPが0になった瞬間、センサーが作動し、搭載されている予備バッテリーから、君らの体に致死量の電撃を流すような仕組みがタラリアにはついている。さらに、確実に死ぬように直接脳に電撃が行く仕組みにもなっている』

ゾクリ、と全身に震えが走る。

たしかこの仮想世界に来る前に、俺は頭にヘッドギアのような物を被ってはいいたが、まさかあれは直接脳に電撃を送る代物だったなんて……。

さらにジェルシート。

あの液体が使われていたシートは、おそらく電気の誘導性が高い液体が使われているはずだ。

電気を流した瞬間、全身に限なく致死量の電撃が行き渡る仕組み

になっていたのか…。

……というか、ちょっと待て。

「少なくとも現実の体はゲームがクリアされるまで、ずっとタラリアの中にいるっていう事になるんだよな！？プレイしている間ずっと水分や栄養とか、肉体が取れなくて衰弱死するんじゃないのか！？」

俺の言葉に、近くにいた人達の表情が強張った。裾を掴んでいた少女も、俺に向かって驚愕の表情を浮かべている。

俺の疑問に答えるように、空に文字が刻まれていく。

『なお、ゲームをプレイしている間の君達の体なのだが…安心したまえ、今頃タラリアに備え付けている生命装置の機能が、君らに必要な水分と栄養と酸素を、体に提供している。さらに君らの体から排出される老廃物は、全てジェルシートに吸収される仕組みにもなっているのです、君らは安心して冒険に専念してくれ』

「ふざける！」

あまりにもふざけた言葉に、俺は声を荒げて空に向かって怒鳴りつけていた。

「いつ死ぬか解らないゲームをプレイしろだと？ふざけるのも大概にしる！人の命をなんだと思っただやがる！！」

「そつだそつだ！」

「こんなふざけた事に付き合ってられるか！」

「帰せ！俺達を元の世界に帰せ！！」

俺の叫びに続き、周りから次々と抗議の声が響く。

だが俺達の言葉を無視するかのように、次の言葉が浮かび上がる。

『君達がこの理不尽な状況に怒りを覚えるのも無理はない。だが…いい加減現実を認めたらどうか？』

「……っ！」

『君達がどれだけ抗議の言葉を上げようが、この世界から脱出する事は不可能だ…それに、現実の世界から助けてもらおうなどと考えない方がいい。外部から無理やりタラリアを解体しようとする、強制的に電撃が君達の体に流れる仕様になっているのだから…』

「なっ！」

それはつまり…現実世界からの助けは期待できないっていう事なのか……？

『理解したか？君達はこの世界から逃れる事は出来ない。ただ一つの方法を除いて…』

重苦しい沈黙が周囲を支配する。

現実からの助けは期待できない。

この世界から脱出するには、ゲームをクリアする意外方法は無い。ただその条件が、二百体のボスを攻略しなければいけないということだ。

この時点で大多数の人間がクリアをするのにためらいを覚えるだろうか…さらに痛みや死を恐れて、ゲームに参加する人間がかなり限

られる。

『では、諸君がどのようにこの世界で過ごしていくのか、あるいはどのように生活していくのか…見せてもらおうとしよう……さあ、旅立て、冒険者たちよ』

「……………」

「……………」

その後、空の景色が深紅から元の青空へと変化した途端、俺は茫然としている彼女の手を取って人ごみから離れた…噴水近くの芝生の元へと、いつの間にか歩いていった。

「……………」

「……………」

先程から俺達の間には会話は無かった。名前も未だに交わさず、ただお互いに黙って背中をくっつけあってその場に座り込んでいただけだった。

背中越しから相手の温もりが…例え仮想のものだとしても、それがとても温かく、離し難いもののように今は感じていた。

その温もりは、ゆっくりと冷え切った心を優しく溶かしていくよ



うな…そんな優しさがあった。

「…どうして」

「ん？」

どれぐらい経ったのだろうか、背中越しから彼女の声が聞こえてきた。

「どうして、こんな事になったんだろう…」

「……………」

「私ね、友達にこのゲームの話聞いて応募して…それで、偶然、当たって…どうしようかって悩んでたら、友達がね、行ってきて感想聞かせて！って言われて…それで……………」

「…………この状況に巻き込まれた、ってか……………」

「うん…どうしよう…感想、ひよっとしたら言えなくなっちゃうかも……………」

「……………」

「…………どうしよう、私、約束破りになっちゃうね…針、千本、飲まないと、だね……………」

あはは、と乾いた笑いが背後から聞こえてくる。

この状況だと言うのに、彼女は必死に俺に話題を振って来ていた。それなのに俺は口々に答えてやる事が出来ない。

「こう言う時、気の利いた言葉でもかけてやる事が出来ない自分に腹が立って仕方ない。」

「……ねえ」

「……なんだ？」

「……これから、どうしようか」

「……どうも……俺はゲームを進めるさ」

「……どうして？」

驚いたような感情を込めて、彼女が聞いてくる。

多分だが、俺が即答したのに驚いているんだろう。

ほんの少し前にゲームオーバーは死へと繋がる、などと宣言されたにも関わらず、このデスゲームを進める、などとあっさりと言った事に、彼女は疑問を抱いたのだろう。

俺は一息吐くと、ゆっくりと告げる。

「向こうに妹がいるんだ……あいつ、生まれ付き体が弱くて、いつも俺にべったりだったから俺が死んだら絶対泣くだろうしな……早く帰って安心させてやらないといけない」

「……そんな理由で？」

「そんなもこんなもじゃねえよ、兄貴ってのは妹の笑顔を守ってやる存在なんだ。だから絶対に泣かしちゃいけないんだ。」

そう、これが俺の生き抜こうと思う理由だ。  
向こうには奏恵や…俺の家族が俺の帰りを待っていてくれるかも  
しれないんだ。

なら帰らなければならぬ。

俺が死ねば、少なくとも俺の家族は泣く。

家族を泣かすなんて、俺には出来ない。

理由なんてそれで十分だ。

彼女はどのようなだろうか？と疑問に思った時、背中越しで彼女が  
苦笑する気配がした。

何か変な事を言っただろうか？と思ったら。

「それ、死亡フラグだよ？」

「……………」

予想と違う、斜めからの角度の言葉を受けて、思わず言葉を詰ま  
らせる。

それをこの状況で言うか？

正直シャレにならない。

だが。

「…………でも、そうだよね…帰らないと…帰って、安心させてあげな  
いといけないよね」

今まで暗いものだった彼女の言葉に、どこか力がこもったような  
ものになっていた。

「そうだな…誰であろうと、ちゃんと帰って安心させたやらねえと  
いけない。そのために、俺は前に進むぜ」

「……なんか、主人公<sup>ヒロイ</sup>みたいだね、君」

「主人公、ね…だったらさっきの死亡フラグも折れるかもな」

「きつと出来ると思う…貴方なら」

「そっか…なら！」

言つと同時に俺は立ち上がる。

すぐ下で、わわっ！という慌てたような声が聞こえたと同時に足に少しだけ衝撃が伝わった。

どうやら俺に背中を預けていたせいで、いきなりそれが無くなったせいかバランスを崩してしまったみたいだ。

だが俺は振り返って彼女の顔を見て笑顔を浮かべながら手を差し伸べて、言う。

「プロローグで立ち止まってる場合じゃねえよな」

「……………」

しばらく彼女は俺の顔を見ながら茫然としていたが。

「うん！」

笑顔を浮かべて俺の手を掴んで立ち上がる。

これから色々大変な事が起きるのは解ってはいるが、そんなものは今の俺達にとっては大した問題に思えない。

きつと乗り越える事が出来る。

そう思えた。

「あつ、そういえば」

「？」

ふと彼女が何かを思い出したかのように声を上げた。  
一体どうしたというのだろうか？

「名前、まだ聞いてなかったね」

「……………あ」

そーいや、そうだったな。

名前を聞く暇なかったのか、と言われれば……………結構あったのに、  
なんで今まで聞かなかったんだらう。

その事に苦笑しつつ、俺達はようやく自己紹介をし始める。  
まずは彼女から。

「私の名前は櫻木月姫さくらぎつきひめっていいいます。趣味はゲームに、ライトノベルを読む事です！アバターネームは『Lunaルナ』っていいいます！不束者ですが、よろしくお願いします！！」

「なんか重い！」

不束者ですが……………って。

なんか漫画とかではよくつかわれるネタだけど、リアルで自己紹介の時にその言葉を遣われると少し……………いや、かなり返答に困る。

だが彼女は「え？」と首を傾げながら……………。

「だってこれから互いに支え合いながら行くんだよね？男女だし、間違っっては……………」

「方向性が違うぞ！」

たしかに俺達は異性同士だし、これから仲間として支え合いながら頑張っていくんだろうけど、さっきの言葉はけしてこの場で使うものではないと思う。

……なんか微妙に疲れたような気がする。

はあ、とため息を吐きながら俺は自己紹介する。

「俺は四季町<sup>しきまち</sup>空人<sup>そらひと</sup>。趣味は特にないけど、特技は料理だな。まあ、喧嘩とかは多少慣れてるから、戦闘ではそれなりに役にたつと思うぜ？ちなみにアバターネームは『COU』だ」

「え？四季町！？」

俺の名字に、彼女は驚いたような表情を浮かべる。  
一体どうしたというのだろうか？

「ね、ねえ……」

「なんだ？」

「もしかして……奏恵ちゃん、っていう妹いない？」

「なっ！？知ってるのか！??」

「うん……私、奏恵ちゃんと友達なんだ」

……奏恵に知り合いがいたなんて驚きだ。

あいつ、入院生活ばかりだったから、友達なんてあまりいない

んだらうと思ったのに。

ある意味、これが今日一番俺が動揺した事なのかもしれない。

## 第四話 現実と化する仮想世界（後書き）

感想、批判、待っております。



## 第五話 傷つく仮想の体 本物の心

「てえい！」

「ぎゃあああああ！！」

掛け声と共に、脳天から一刀両断されたゴブリンという名前のモンスターを一瞥しながら、俺は目の前で剣を振るっている少女…銀髪に群青色の瞳、意外と大きな胸を持つて…さらに家の妹と親友という驚きの関係の女の子。

櫻木月姫、アバターネームは《Luna》。

俺は彼女の事を櫻木と呼んでいる。

ツキは鞘に剣を収めると、目の前に表示されているメニュー画面を覗き込み、その後にはペア、と笑顔を浮かべた。

おそらくレベルが上がったのだろう。

「やつ…やった！」

「櫻木、お疲れさん」

「うん、これもクーのおかげだよ」

彼女に歩み寄り、互いに手を上げてタッチする。

これで彼女のレベルは4、ちなみに俺は先ほどレベルが5になった。

最初は死ぬかもしれないという戦闘に怯えていた俺達だったが、俺は喧嘩慣れしているから、割と早く戦闘に慣れる事が出来たのだが…明らかに喧嘩に慣れていない、というか喧嘩から縁遠いように

みえる櫻木が数回の戦闘で戦う事に慣れているというのは驚きだった。

「割と早く戦闘に慣れる事が出来たみたいだな、櫻木」

「うん、最初は怖かったけど…でも、だんだんと慣れてきたみたい」

その言葉に俺は脱帽する。

どこかの言葉に「一度慣れてしまえば女は強い」というものがあった様な気がする。

なるほど、頼もしい限りだ。

もう少し時間がかかるかもしれないのかと思っていたけど…この様子なら問題は無いかもしれない。

「んじゃ、これまでの戦闘で解ったことをまとめてみるか」

「了解…あつ、また敵だよ！」

「えっ、お、お〜い」

俺の言葉を聞かずに、鞘から剣を抜いてモンスターに向かって走っていく。彼女の動きを感知したのか、モンスターが彼女に向かっていく。

「あいつ…」

剣を振るって戦っている彼女の様子を見てため息を吐く。

櫻木は剣をモンスター達に向かって振るってはいるが、防御がまだまだ甘い。時々、防御するのを忘れて攻撃を受けて、所々掠り傷が生まれている。

どうやら俺の心配は杞憂でもないらしい。

多分だが、彼女は焦っているのだらう。なぜ彼女が焦っているのかはおそらくだけど…。っと、そんな事を言っている場合じゃない

か。

「下がれ、櫻木！」

「っ！う、うん！！」

俺の言葉にバックステップしてモンスターから離れる櫻木。モンスターとツキとの間に開いた距離に身体を潜り込ませ、櫻木に向かってくるモンスター：豚の獣人モンスター、オークが彼女に向かって振り上げている拳に向かって剣を振るう。

オークの拳に剣が突き刺さり、血飛沫が手のひらから溢れる。その後、オークの上に表示されているHPバーが少しだけ減少する。

「ぜあっ！」

気合と共にオークの腹を蹴りつけ、さらに肩から奴の腹にタックルをくらわせる。俺の攻撃に体制を崩されたオークは、そのまま後方にいたオーガに向かって倒れこむ。

（ここだ！）

剣をモンスターに向けるように水平に構える。

刀身に青い光が宿り、背中中央からエネルギーのようなものが噴き出す感覚がはしる。それと同時に、体を一気に奴らに向かって突進させる。

片手剣・フアング・モーメント。

直訳すると一瞬の牙、と呼ばれるそれをオークの左胸に叩き込み、ついでに後ろにいたオーガも一緒に串刺しにする。

「ぐおおおおおおお！！」

俺の攻撃に悲鳴を上げるモンスター達。  
体から噴き出す血飛沫を体に浴びながら、俺は後退する。  
生暖かく、鉄臭い液体を不快に思いつつ、俺は自分が殺した相手  
の様子を見る。

今の俺の攻撃で、オークはHPを全て失ったようだ。血を噴き出しながらそのままゆっくりと地面に向かって倒れていくが、その途中で体は静止し、光の粒子となって消える。

だが倒せたのはオークだけ。

後ろにいたオーガはまだHPが残っている。

手にした棍棒で俺に向かってギラギラと憎しみの感情をぶつけてきながら、攻撃を仕掛けてくる。

だが、甘い。

「櫻木！」

「うん！」

俺の合図と共に、後方からオーガに向かって接近していた櫻木は剣を振りかぶって背中から斬りかかる。

突然の奇襲にオーガは対応出来ずに、その一撃を浴びてHPを全損させ、その体を粒子へと変える。

これが俺達の考えた戦闘方法。

俺達のどちらかが敵の気を引いている間に敵の背後へと回りこみ、奇襲を仕掛ける。

卑怯かもしれない戦闘方法だけど、生き残るために戦わなければいけないのだから仕方ないと割り切るしかない。

まあ、使っていて気分がいいものではないけどな。

「はあ……はあ……」

「大丈夫か、櫻木？」

荒い呼吸を繰り返している櫻木の肩に手を置く。  
やっぱり彼女はどこかで無理をしているみたいだ。

……無理もない。

昨日はなんとか頑張ろうと意気込んだ俺達だけど、彼女は俺と違う。

彼女は…女の子だ。

男の俺と違い、心はきつと繊細なものに違いない。  
だから。

この状況に心を痛めていない訳がない。

怖くないはずがない。

苦しくないはずがない。

辛くないはずがない。

悲しくないはずがない。

寂しくないはずがない。

「帰ろう、今日はここまででいい」

「私は、まだ、大丈夫……だよ」

そういつて、俺に笑顔を向けてくる櫻木。

だがそれは傍から見ても無理をしているというのが丸分かりだった。

心のどこかで、彼女はこの状況を受け入れることが出来ずにいる。  
無理もない話だ。

楽しくなるはずだったものが、それが牙を向けて俺達に向けられている。

仮想の敵が振るった暴力は、俺達の仮想の肉体を傷付け、さらに痛みへと変化して襲い掛かり、心を傷付けながら魂を磨り減らしていき、やがて逃れられない死へと繋がる。

これがたった十四歳の少女に耐えられる重みなんだろうか？

……答えは当然、ノーだ。

昨日は何とか頑張ろう、と言える事が出来たんだろうけど…それはきつと空元気にも等しいものだったはずだ。

けれど、そこには確かに彼女の決意もあったはずだ。

だからこそ俺は。

「帰るぞ…今日は、もう疲れた」

「……………うん」

彼女を無理やりにも引っ張って、休ませてあげるくらいしか出来なかった。

フィールドから街に戻り、宿を手配して部屋を予約する。

始めて宿で泊まるのに、昨日は少しばかり緊張してしまっただが…宿の店員が温厚そうな顔つきの猫のおばちゃんだったのを見て、緊張していたのがアホらしくなってしまい、割と簡単に宿を取る事が出来た。

もしかしたらプレイヤーの緊張を取るために、ああいった仕様にしたのかもしれない。

受付の猫おばさんから受け取った鍵を手に持ち、受付の隣にある魔法陣が描かれたドアの前に立つと、扉が自動的に開く。中に入ると狭い個室で、個室の中の壁には複数のボタンが備えられていて、その中の数字が描かれた？と書かれたボタンを押すと、扉が閉まり、軽い浮遊感と共にゆっくりと個室が上昇していく。

……………言わなくても解るだろう、これはエレベーターだ。

なぜファンタジー世界にエレベーターなどという科学技術の産物があるのかと疑問に思ったのだが…受付のおばちゃん曰く『重力系の魔術を施した術式を使っている』との答えが返ってきてしまい、いささか腑に落ちない気分です。俺はこれを使っている。

ファンタジー世界の中でこういった現代の科学技術みたいなものを使っているというのは、どうも違和感がある。

廊下を歩き、指定された部屋の扉の鍵を開ける。

ドアを開けて目に入ってきたのは使いやすそうなダイニングキッチンだった。

戸棚の中を空けてみると、フライパンや鍋などの調理用具一式がそろっていた。

更に調理した料理を入れる器、容器などの類までそろっている。

他の部屋の内装などを見てみると…トイレ、シャワールーム、壁際には二つのベッド。さらにテーブルの上には水晶のようなものと、その近くには小さな四角形に複数のボタンのようなものが付いている…なんか見覚えのある物が置かれていた。

とりあえず、これはスルーしよう。うん。

カーテンを開けると、窓からは町の景色が一望でき、外に広がっている夜景は、現実の世界とはまた違った味わいを見せてくれる。

…などと、少々現実逃避してはみる。

しかし目の前にある現実は決して変わることはない。

昨日然り、そして……。

「……………」

チラリ、とベッドの上に座っているものを見る。

サラリとした銀髪に群青色の瞳を持つ美少女。

櫻木月姫がそこにいた。

(……………なんで、同じ部屋なんだあああああ!?)

心の中で俺は絶叫するしかなかった。

正確に言えば、あの猫おばさんの前で部屋を別々にしてほしいと頼むつもりだったのに、頼もうとすると櫻木がなぜか俺の服をちょん、と掴んでしまう。振り向くと、櫻木は自分の行動に気付いてパツと手を離すんだけど…おばさんに視線を向けると、また俺の服を握る。

で、気がついたらなぜか一緒の部屋を頼んでいた。

自分でもなぜこうしてしまったのか理解できなかった。

そもそも俺は別室にしようとしていた。

同い年の男女が同じ部屋、しかも一晩過ごす…なんて脳内では色々やってはいけないような行動が浮かんできてしまうが、それを無理やり取っ払い、彼女の肉体と心を休ませるためにも、別室にしようとした…はずなのに。

(なんでこうなるのさ！なんでこうなるのさ！)

俺は別に邪な考えがあつて同室にした訳じゃない。

ただ単に一緒の部屋は色々と気まずいだろう、というか精神的にも落ち着かないだろう、色々とマズイだろう、着替えとかどうするんだ、寝るとき緊張する、俺の剣が勝手に必殺技を発動させてしまう……などの様々な理由から俺は別室を希望しようとしたのに…なんでこうなってしまったんだ？

正直、かなり気まずい。

しかも同室にしてほしい、なんて言った瞬間猫おばさんが「あらあら若いわね」なんて誤解を招かれない台詞を言ってしまったから、俺たちの間には一切会話が無かったからますます気まず過ぎる。

やばい。

普段クールでいようと密かに努力している俺が、今はまったく冷静でいられなかった。



十五年間生きてきて、色々な事があった。

女の子っぽいという顔つきでよくいじられ、その度に二度といじる気が起こらないように徹底的に痛めつけまくった日々、女の子っぽいという顔つきのせいで老若男女問わず女の子扱いされそうになったり、この女の子っぽい顔のせいでデートタベースサービスの初日に女子更衣室に拉致られたり……本当にこの顔のせいでろくな思い出はないな、うん。

なんて現実逃避をしても現実って言うのは変わらない。

とにかく、なんでもいい！逃げてるだけじゃ現実是不変ならないんだ！なら、少しでも帰るように動け、四季町空人！！

「な、なあ櫻木」

ベッドに座っていた櫻木に向かって声をかけようとした　のだが、櫻木はベッドの上で横になり、規則的な寝息を立てながら眠っていた。

「はっ……ははっ」

笑いながら俺は壮絶な脱力感と共にその場に座り込む。

なんか今まで独り相撲していた自分がもの凄くアホらしくて仕方なかった。

「すー、すー……」

彼女の寝顔を見ながら、俺はため息を吐いて彼女に毛布をかけてやった。

昼間慣れない戦闘を繰り返した疲れがドツと出たのだろう、ぐっすりと眠っていた。当分起きないかもしれない。

「……………」

今の時間を確認してみる。

時刻は午後七時。

まだまだ寝るには早すぎる時間だ。

俺も昏間は彼女と同じくらい戦闘を繰り返しているが……なにせ向こうで喧嘩慣れしている身だ。まだまだ余力はある。

最も、この世界で肉体的疲労なんてものはない。

俺のこの体は現実の肉体ではなく、様々なデータで作りに出された仮初めの肉体だ。

データで作られたものだから、どんなに動いても疲労というものは特に感じない。

あくまで肉体的な疲労では、という意味だが。

さて、どうする？

このままここにおいても退屈だし、だからといって何かしたいものがあるのかと聞かれると返答に困る……………」。

「……………」

ふと、ダイニングキッチンに目が行った。

立ち上がってキッチンの間取りを調べてみる。

コンロは向こうと同じ、電気熱で物を温めるものようだ。

水道は蛇口をひねれば使えるし、冷蔵庫も問題ない。

さらにオープンのようなものであった。

ファンタジー世界をモチーフにしている割に、結構現実世界に存在している物が多々あるこの世界観に苦笑しつつ、俺は一つの決心をした。

決まったのならば、すぐさま行動。

鉄は熱いうちに打て、だ。

ベッドの上で眠っている彼女に書置きを残すと、俺は部屋から出て

一つの場所に向かっていった。

第五話 傷つく仮想の体 本物の心（後書き）

感想、批判、待っております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6188z/>

---

My a Tail Online

2012年1月14日13時42分発行